

短 信

のりもの 乗物としてのグライダー

小 野 哲

グライダーは格別であることは誰にも分っているが、そこにたどりつくのに、どれ位乗り替えたか。

私の場合、最初の乗物の記憶はスプリングの効いた大きな4輪のゆり籠風の「乳母車」だった。その次は御大典というからには、昭和天皇の即位式のお祭騒ぎを、叔父の「肩車」で、提灯行列を見たこと。詳細があやしいのは聞いた話なのだろう。3つ目は「タクシー」でシボレー。4つ目が蒸気機関車に引かれた「客車」で、扉がズラッとステップに並んだ、要するに車内に通路のない4人か5人並んで腰かける木造車、乗ったことのある人は極端に少なくなった。

東京に引越すことになって、別府港のゆるる浮棧橋で乗船の汽笛でとびあがって驚いたのが「汽船」。東海道本線の汽笛ではとびあがらなかったが驚いたことはたしかで、後のち警笛で驚く妙な癖がついて焼芋屋の甲高い音にもおびえたものである。そのくせ「市電」、当時は都電でなくて市電で「市バス」。そして山手線「省線電車」などの警笛には一向動揺しないのはいかなることか。目覚し時計のベルも苦手な音であるがツェッペリンのエンジン音は今もなつかしく耳に残っている。

10番目が京浜線の電車と列車。大塚駅のホームで、貨物線を蒸気が分解した97戦を、シート掛けのすそからそれと判かるのだが、トキ車輛数で20台、30台、と数えたことを思いだした。これは満州事変の頃のことで、有蓋貨車ワムと無蓋トキに乗ったのは内地ではなくて中支だった。

ツェッペリンはおろか気球類には乗る縁がなく、繫留熱気球は汽笛なみの騒音でまた乗りたいとは思わないが、自由飛行のチャンスなら耳をおさえて乗るに違いない。

遊園地の飛行塔で乗ったのが飛行機の初乗りとはいえまいが、四日市の浜で双フロート複葉の水上機に乗ったのが陸軍の整備兵訓練とどう繋がるのか今だに夢見のような記憶である。

旅客機には乗るチャンスがないままに、偵察機と爆撃機には乗せられた。要するに整備責任で乗ったのであるが、爆音は相当こたえるのが見下す紫金山の景色に夢中で、震動も爆音も気にならなくなるから勝手なものである。

操縦資格も能力もないから、単座戦闘機の5種はあこがれの乗物であるが、あれはやかましいばかりでかつ危険な乗物であると瘠我慢でかわす。

民間航空は乗らないではすまないが、気がすすまない。ヘリコプターもたまには気晴らしの震動と騒音の乗物であるから、仲々好きになれない。

各種の新幹線は、平成になってから毎週のように乗りついで、同じ車輛の同じ座席に坐った偶然に驚いたこともあったが、6時間を超すとつらくなる、ということは4時間や5時間は快適な乗物ということになる、不思議だ。

自動車はヒルマンミンクスを無理矢理30年も乗りつづけたが、いまはトヨタのカリーナで満足している。一度に3時間乗るのが限度になってしまったが、乗物としては2番である。

1番はどうした。私にとっての乗物の1番は「ソアラー」だ。憧れの乗物なので、めったに乗れない。誰かに操縦してもらわなければ乗れないのが玉に瑕だが、当分は憧れの乗物でありつづけるだろう。アイオンもイオラスも。憧れの乗物は、たまに乗るから値うちなんだなど負けおしみに違いないが、グライダーの自由飛行ほどのすばらしさは他の乗物からは得られない、宇宙衛星も及ばない。ほんと、いやどうも。

部長短信

坂口 一彦

いよいよ20世紀最後の年を迎え、団体または個人でも来たるべき新しい世紀へ向けていろいろ思索を練っている状況と推察します。日本学生航空連盟でも2、3年前から21世紀への対策について検討されています。紙面の都合上、ここでは最近の学連の動向を中心に述べてみます。

「学連21世紀像を考える」委員会の報告を受け、専技協メンバーを中心としてワーキンググループが組織され鋭意議論が進められています。ワーキンググループより、機体・機材、滑空場開発、モーターグライダー、競技会、学生確保の5つの専門部会が構成されています。基本的には学生のグライダースポーツを側面よりサポートするのが目的ですが、組織としての骨組みは学連を中心とし、学生の所属する各大学航空部との提携によって機能するものと思います。

先般6月に開催されました東海・関西のワーキンググループの会議において討議されました一部をご紹介いたします。まず日本学生航空連盟寄付行為付属綱領、2010年までの活動目標(案)が承認されました。その活動目標は、1. グライダースポーツの普及ならびにグライダー界のリーダー、2. 多くの学生が参加できる環境の育成、3. OB・OGの皆様の協力を得られる仕組の整備、4. 滑空場整備と新たな開発、5. 電子情報技術の積極的利用システムの構築といった五つの目標に向かって各支部は対応することとなりました。それと同時に各支部規則の改定も必要となってまいります。

いろいろと議論を進めていくにつけ、学連の諸規定と各支部の現状とのギャップ、これをどのように整合性を保って行くかといった問題がクローズアップされてきました。学連に所属する各支部間にも若干の見解に相異がみられ、最小公倍数で

まとめるより他には方法がないように思われます。

極く最近の動きとしては、京都大学が1998年9月1日付で学連に加盟いたしました。8月現在12名(届出人数)の学生が所属し、今後の活躍が期待できます。学生にとって全国大会、地方大会などへの出場はグライダースポーツを愛する人間同士の絆の増大につながるものと思います。

東海・関西支部としては懸案の木曾川宿舍の建て替えの問題が解決し、不便をかけていました学生ならびに教官の皆様には朗報です。また新しい滑空場の開発、以前より検討され各省、地方団体などへのアプローチを着実に進め具体化の道が開けてきたといった状況です。学連の現況は以上です。

ここでわが同大航空部の悩みを吐露いたします。一番の悩みは部員数の漸減です。毎年試行錯誤を繰り返しながら勧誘を進めています。しかし年々変化する学生の気質、多様化した時代への対応の難かしさ、これはわが大学のみの問題ではなく、学連の主要議題の一つでもあります。現在一般に大学の体育会系のクラブでの活動が即就職などに結びつかないといった現実があります。結果を急ぐあまり、これからの永い人生に目を向けていないといった感じがします。今年も間も無く4月がまいります。翔友会の諸先輩の皆様のご協力ご支援によって、夢を描ける新しい年度となることを期待しています。

監督短信

昭和62年卒 新庄博志

平素は、学生の活動に深いご理解と、惜しみないご協力を賜りありがとうございます。

昨年は、近年の不調を吹き飛ばすかの勢いで、同立戦では、個人戦では優勝したものの、選手の絶対数の差で規定により、団体優勝を逃すという不運もありましたが、東海関西競技会では好成績で入賞をはたし、全国大会の出場権も獲得しました。が、出場選手の家庭の事情で、参加辞退に至ったことは残念です。部員絶対数の不足とそれに伴う選手の層の厚みのなさを痛感させられた一年でした。

さて、話は一昨年にもどります。慢性的な部員不足と、なかなか結果の残せない学生たちを、1年間、冷静に観察していきました。本来、二十歳も過ぎたおとなが運営していく学生のクラブ活動ですから、飛ぶという部分は別として、指導という名のもとに、ああだこうだと押し付けはしないというのが私の方針でしたから、いい意味で、学生たちの、自らの活動に対する責任と自覚を期待してきました。

その中で解ったことは、先輩たちが、入ってきた一年生の心をつかみきれなかったこと。4年間の学生生活の中で、このクラブが価値あるかどうか、今の子供たちは見極めがシビアで、それにクラブが応えられていなかった、ということ。つぎに、数年間にわたる部員の減少の過程で、いままで蓄積されてきたクラブの知識が、すべてがすべて、先輩から後輩へ落とし込みがされず、知識の伝達に欠落のあること。ひと学年に学生が一人という状態が続けば、物理的にもおのずと結果がみえてきます。伝えなければならぬ事、伝えていったほうがいい事、その優先順位も、日々のクラブ運営に追われるなかで、つけられなくなってく

るのも当然でしょう。3つ目は、そんななかで、我々からみればもの足りなさを感じたり、要領の悪さを感じた事も、学生自身からすれば一生懸命やった結果で、その過程に対する分析や振り返りもなされないまま、結果には満足してないものの、過程に満足してしまい、いつのまにか、目標に到達する事の大切さ、目標を超える事のよろこび、目的を果たせなかった時の罪悪感、と言うものを見てみぬふりをしてしまっている事。ストレスに弱くなったといってしまうばそれまでなのですが。

以上の事から、もうそろそろ学生の自力を信じて、願って、改革するのでは手遅れになるという危機感から、一年前、窪田顧問と計画を始めました。当初は、コーチという立場も考えましたが、昨今の経済状態のなか、一人の人物に責任のすべてを任せるのは、あまりにも負担が大きすぎる事。その人物が途中でリタイヤすると、体制のたてなおしに時間がかかること。から、今回の計画の体制は、数人のグループによる円卓会議のかたちをとりました。

とりあえず、関西圏の趣旨に賛同していただいたOBに集まっていたいただき、今年はずは部員のボリュームをあげる事。そして4年後をめどに、新しい教官が生まれることを目標に、この円卓会議をつづけて行きたいと考えています。

現役学生には、「この計画に従わないものは、もういない。」と、少々脅しをかけましたが、いまのところ趣旨と危機感を理解してくれているようです。学生に結果を求めるならば、われわれも目標に対して責任を持たなくてはなりません。どうぞ、力を貸してやれそうだとお思いの方、是非ご連絡ください。次代の航空部のありかたを、一緒に考えようではありませんか。